

「原子カムラ」の境界を越えるためのコミュニケーション・フィールドの試行

第1回業務推進全体会合

逐語録

(木村_浩) 皆さん、おはようございます。平成25年度の原子力基礎基盤戦略研究イニシアティブ、「原子カムラ」の境界を越えるためのコミュニケーション・フィールドの試行、第1回業務推進全体会合を開催したいと思います。

おかげさまで、今年度も無事契約することができました。5月21日から動くことが可能になりましたので、その後、調整をさせていただいて、本日第1回の全体会合ということになっております。

なお、第1回のフォーラムは先週の土曜日に開催をしております。こちらに関しては、後ほど簡単にご紹介したいと思います。

それでは、資料の確認をしていきたいと思います。まず、議事次第があると思います(1-0)。次は名簿です(1-1)。昨年度は連絡先としてメールアドレスを示していなかったのですが、メールアドレスは出しても構いませんというお話でしたので、メールアドレスまで示したのになっています。個人情報が入っていますので、取扱い注意をお願いします。次が、平成24年度の成果報告書の要約版です(1-2)。次が、平成25年度の業務計画書です(1-3)。次が、「フォーラムの進捗」という1枚紙の資料です(1-4)。最後に、フォーラム参加者一覧になります(1-5)。以上が配布資料ですけれども、よろしいでしょうか。

それでは、早速議事に従って進めていきたいと思います。本日は、第1回ということですので、そこまで大きい話がないと思いますので、サクサクと進行していきたいと思います。

0. 自己紹介

(木村_浩) まずは、年度の始めということもありますので、ほとんどの方は顔見知りだと思いますけれども、簡単に自己紹介とさせていただきたいと思います。

まずは私から。木村でございます。今年度から、東大からNPO法人パブリック・アウトリーチ(PONPO)に移りまして、この研究に専念しているという状況でございます。今年度もご協力をよろしく願いたします。

(自己紹介のため、略)

(木村_浩) ありがとうございます。

なお、事務的な話で恐縮ですが、今年度は、昨年度とは事務手続きの形式が異なります。

今年度からは体制が変わりまして、PONPO と原子力学会の 2 つの主体でこのプロジェクトを運営していくということになります。NPO 法人パブリック・アウトリーチが主で、再委託先が原子力学会という形です。

今年度は、人によって、どちらからお金が出るかが異なります。研究者の 1 番から 4 番、8 番、9 番は PONPO からです。5、6、7 番は原子力学会の研究者ということで、向こうに申請していますので、よろしくお願いします。

協力者 (PONPO) と書いてある方は PONPO から。協力者 (原子力学会) と書いてある方は原子力学会から、ということになります。技術補佐員は PONPO、外部評価委員会は今年も 2 回やる予定ですが、こちらは PONPO で全て手配いたします。

そういう形で、今年度は、人によってお金の出どころが変わってきますので、旅費の申請などの際は注意をして手続きをお願いできればと思います。

1. 平成 24 年度業務報告

(木村 浩) 最初からお金のお話で恐縮です。早速次の議事に入っていきたいと思います。1 番目は、昨年度の報告です。皆様には成果報告書を PDF でお送りしていると思います。報告書のほうはそちらをご覧くださいと思います。

ここに用意したのは成果報告書の要約版です。これを見て、昨年度やったことを思い出していただければと思います。

まずは、3 ページ目を見ていただければと思います。これが去年の業務計画です。まずは、3 年間を通した目的が、2.1 全体計画というところに書いてありますので、これは一応読み上げたいと思います。

本業務は、市民と専門家に対する社会調査をベースとしたコミュニケーション・フィールド (「フォーラム」と呼ぶ) を構築し、参加者への意識調査から、フォーラム参加によるダイナミックな意識・態度・信頼の変容を明らかにするとともに、「原子カムラ」の境界を越えるためのコミュニケーション・フィールドの枠組みおよび要件を見出すことを目的とする。

ということです。今年度も、同じ目的で業務を計画しております。

それに従って、昨年度は何をしたかということ、まずは 2.2.1 社会調査を実施をしました。原子力学会で再委託をしまして、首都圏住民 500 名と原子力学会員 500 名規模に対してアンケートを実施しました。その他、フォーラム参加者への意識測定項目の作成ということで、ここまですを昨年度実施したということです。

もうひとつは、2.2.2 フォーラムの設計ということで、コミュニケーション・フィールド

の関連研究を整理して、フォーラムを設計して、参加者を決定する、というところまでが昨年度の大きな業務になります。

2.2.3 の取りまとめや、2.2.4 の外部評価は、粛々とやらせていただきました。

それでは、それぞれについて簡単にご説明したいと思います。3.1 に関しては土田先生にお願いしてよろしいでしょうか。

(土田) はい。原子力学会がなぜここに入ってきたかという理由のひとつなのですが、原子力学会は、7年間くらい、毎年1月に、首都圏住民500人と、原子力学会員550～600人程度に対して、調査を行なっています。

昨年度から、この調査をフォーラムと一緒にやろうということになりました。フォーラムのほうからすると、フォーラム参加者が偏っていないかどうかということをチェックできる。あるいは、メンバーが偏っていたとしても、どのような偏りかをこの首都圏調査や原子力学会員調査に基づいて調べることができるということになります。

今年も1月に社会調査を行ないました。5ページ目に書いてある通りです。

主な知見ですけれども、簡単に言いますと、一昨年の福島事故の結果、首都圏住民も原子力学会員も原子力に対して否定的な態度に変化しました。特に首都圏住民のほうは、これ以上下がりようがないくらい原子力に否定的な意見が増えましたし、また、原子力に携わっている人は信頼できないということになっています。

昨年度、1年経ってまた調査を行なったのですが、首都圏住民のほうはほとんど変化がありませんでした。原子力に対して悪い態度を持っているということです。ところが原子力学会員は、これは推測ですけれども、昨年度末に自民党が勝利したこともあってか、事故前まで完全に戻ったわけではないですが、原子力いいんじゃないかという方向に戻っています。信頼に関しても同様の傾向です。

原子力規制委員会については、首都圏住民はよく分からないから判断できないと。原子力学会員は、全面的な信頼は置けないというような結果でした。

原子力に携わっている人たちや組織に対する印象ですが、原子力学会員のほうが自虐的といいますか、自分たちは一般の人たちから悪い目で見られていると思っているのだけでも、首都圏住民は、それほど好意的ではないのだけでも、そこまでひどい目で見ているわけではないということですね。一応感謝もしてくれているということです。

調査に関しては、そんなところです。

(木村^浩) ありがとうございます。調査のほうも粛々とできたということです。

それに従って、フォーラムの参加者を決定していきました。ですが、まずはその前に、フォーラムに関して昨年度は何をやったのかということをお話させていただければと思います。9ページから、フォーラム関連の実施内容が書かれています。

まずは、コミュニケーション・フィールドの関連研究を整理をしました。コミュニケー

ション・フィールドを新しく作るにあたり、どういうことに注意をしたらいいのか。また、どのように検討していけばいいのか。そういった調査、検討が最初の業務でした。既往の様々なコミュニケーション・フィールドの種類がまとめられている報告書を基にして、9ページにありますけれども、①から⑨の、名称、形式、関与の程度等々の観点から整理を行なってみたい。その中で、参加型のコミュニケーション・フィールドに着目をして、どういう議論が行なわれているのかを調査をしたり。そういうことを経て、11ページの真ん中ぐらいにありますけれども、ここまでの議論を踏まえて、本業務の意義、新規性を改めて整理するということまで結びつけたということです。

簡単に、どういう意義、新規性にしたかということを示しておきますと、1つ目の問題として、従来型の情報提供型コミュニケーション・フィールドが、現在、信頼が激しく損なわれていて、意味をなしていないという問題がある。それに対して、専門家と市民の相互作用が起こるような取り組みを取り入れたらどうか。従来型では、どちらかといえば市民参加ということで、専門家ありきで市民が参加するようなスタイルであった。そこに、市民と専門家が両方参加していくというようなことを取り入れることによって、この2つの間での相互作用を起こすことができないか。というような提案として、新規性を見出したというのがひとつ。

もうひとつは、コミュニケーション・フィールドの公平性に関する不信について、コミュニケーション・フィールドの目的を社会に明示しながら公開していくとか、フォーラムとして持つべき要件を整理した、というところが、最初の実施した業務ということになります。

それを受けて、フォーラムの設計を始めていきます。既往の研究の中で、若松先生の整理を参考にしながら、12ページにありますけれども、(1)から(5)の枠組みで整理をしていったということになります。「観察者の目的設定」、「コミュニケーション・フィールドの目的設定」、「テーマ研究、専門家ネットワーク」、「市民パネルの募集、決定」、最後に「ワークショップの内容、段取りの決定」という進め方をしていきました。

(1) 観察者の目的は、我々の視点ということで、業務の目的と一致する、と定義させていただきます。

(2) コミュニケーション・フィールドの目的設定は、結論としては、フォーラム参加者の目的と観察者側の目的を同じにすると設定しています。すなわち、我々としては、どうやって原子カムラの境界を越えていくのかということが大きな目的ですけれども、この意識を参加者にも持ってもらおう。それに賛同した方に参加してもらおうということに決めて、今年度は実施をしております。

(3) テーマ研究・専門家ネットワーク。フォーラムというのは、専門家ありきの話し合いの場ではなくて、まあ、専門家ありきの意味が難しいですけれども、ある意味では「市民」というラベルと「専門家」というラベルは貼られているものの、専門家が絶対的な情

報の提供者であるという状態を作るものではないので、講師は原則として呼ばないことにしています。ただ、これは流れによって変わってくる可能性もあるということです。また、ファシリテーター、サブファシリテーターに関しては、研究実施者や研究協力者が実施して、全体を統合していく、とこの時点で決めさせていただいていました。

(4) 市民パネルの募集、決定に関して。ここは重要ですので、少し読ませてもらいます。フォーラム参加者は、首都圏住民 10 名程度と原子力専門家 10 名程度とする。ここで、参加者の選択は社会から見てなるべく公正でなければならない。原則として、本業務で実施した「エネルギーと原子力に関するアンケート」調査回答者から参加者を募り、それぞれなるべく属性の異なる 10 名程度を選択する方針とした。優先する属性として、首都圏住民に対しては、年齢（2 段階）・性別（2 段階）・原子力の利用、こちらは、利用します、どちらともいえない、どちらかといえば廃止、という 3 段階に分けています。原子力学会員に対しては、年齢（2 段階）・専門領域を優先するという。また、応募者が少ない、意見のバランスが取れない等の場合には、年齢、性別、原子力の利用のバランスを見て、参加者を追加的に調整することとした。ということです。こちらが後々の参加者の決定というところに効いてきますので、読み上げさせていただきました。

(5) ワークショップの内容、段取りの決定。フォーラムは全 5 回。5 回の日程はあらかじめ決めて、参加者を募っています。隔週の土曜日で、5 月 25 日から開始しています。第 1 回は「原子カムラとはなんだろうか」というテーマで実施したということです。第 2 回からはテーマ案ということで、これからフォーラム研究会のほうで議論しながら、またフォーラム参加者の意見も尊重しながら、決めていきたいということです。

さらに、5 回のフォーラムが終わった後は、話し合った内容を要約して、一般公開のシンポジウムを開催することにしています。

なお、フォーラムの公開に関する方針というのは、重要といえば重要なのですが、今日は割愛します。皆さんであとで読んでいただければと思います。

最後に、フォーラム参加者の決定について、少しお話をしたいと思います。フォーラムの募集書類一式を、社会調査の書類と一緒に入れて、募集をした結果として、予想に反しまして、首都圏住民からは 8 名、原子力学会員からは 25 名の応募があったということになります。

これらに対して、フォーラム参加者の決定の指針に従って、匿名で選抜作業を行なって、首都圏住民 6 名（男性 4 名、女性 2 名）、原子力学会員 10 名（男性 8 名、女性 2 名）を選択したということです。

なぜ、首都圏住民は 8 名のうち 6 名にしたのかというと、首都圏住民の応募者の原子力利用に関する意見が偏っていたからです。ほとんどが反対の方だけであったということです。母集団に合わせた形にしたいということから、残りの 4 名は、どちらともいえないという人たちと、どちらかといえば利用してもいいという人たちを選択をして追加すると

という方針で、参加者を追加的に募るということをしています。

原子力学会員のほうはこの時点で全部埋まっていますので、この10名で確定ということです。原子力学会は女性割合が少ないということで、女性2名というのはい多いという話もあるのですが、せっかくだからということでお願いをしたということになります。

ということで、結果として応募者が少なかったということもあって、次年度に関して課題をまとめております。

ひとつは、依頼母数が少ないということです。これは輿論科学協会さんとのミーティングの中で指摘されたことなののですが、学会員のほうは郵送ですので、1400人に対して社会調査票とフォーラム申込書が送られている。一方首都圏住民は、社会調査に回答していただいた500名に対して、こういうものもあるので、参加を考えていただけませんかということで、フォーラムの申込書を渡している。割合としては実は同じ程度なのですが（1400名中25名と、500名中8名）、お願いする人が500人だったので、首都圏住民の申し込みが少ないのではないかと。それをどう考えるかというのは、これから議論していきたいと思いますが。

今は首都圏調査は割り当て留め置きでやっていますけれども、社会調査のほうは断られてしまったような場合でも、フォーラムの依頼だけをお願いするようになれば、少し増えるのではないかと案です。

次は、フォーラムに関する情報提供の少なさ。実は、フォーラムの依頼をした時期に、こちらもバタバタしていて、ホームページがまだ開設されていなかったのですね。フォーラムに関する依頼状の情報だけで閉じていたということもあって、一体何をするのが見えなかったのではないかと。こちらに関しては、今年度はホームページも開設しましたし、フォーラムも実績を積み重ねて公開をしていけば、そういう情報が見れるようになりますので、少し敷居が下がるのではないかなと期待しているところです。

あとは、フォーラムの日程が厳しいということが挙げられそうです。こちらは、追加募集をしていたときによく言われたことなののですが、3回くらいだったらどうにかなるんだけど、という人が割と多かったということもあって、次年度は、例えば朝から夜まで丸一日を3回、とかで組んだら、もしかしたら参加率が上がるのではないかと。形態に関しても議論の余地があるなと思っています。

ただ、今年度5回をやってみて、5回でしか出ないような成果が見られれば、これは貫きたいとも思っています。これはフォーラムが終わってから検討することかなということで、ペンディングの議論になります。

以上のような形でフォーラムの検討を行ってきたということでございます。

ということで、前年度の成果報告の概要のお知らせということでしたけれども、何かお気づきの点はございますか。

—— 外部評価に関してはお話がなかったと思うのですけれども、業務の適切性、公正性、学術的新規性等に関する意見を得たとありますが、どういう意見があったのか、主なものがあつたら教えていただければと思うのですけれども。

(木村_浩) 報告書のほうには詳しく書いてあるので、後でそちらもご覧ください。

基本的には、面白そうな取り組みなので頑張ってくださいと。第1回の外部評価のときは、まだ、これが本当に動き始められるのかどうか不安ですというような意見が多かったのですが、3月にやったときには、調査結果も出ていたし、フォーラムの設計もかなり進んでいるところを見て、ある意味では安心をされて、どうにかなりそうな雰囲気になってきたので、頑張ってくださいと。

あとは、社会調査の結果が興味深かったようで、ほとんどはそちらに関するディスカッションでした。フォーラムの運営等についても説明はしたのですけれども、調査のほうに興味を持たれていたというのが私の感想ですけれども。

土田先生、そのときに同席されていたので、何か追加があれば。

(土田) そうですね。フォーラムについては、これから動きますということでしたので、動いた後でまた見させていただきましょと。そういう感じでした。

—— お手並み拝見ということですね。

(木村_浩) フォーラムに関しては、次の議題でお話をしますけど、第1回フォーラムを終わって、一応無事という感じではあるのですが、次にどうつなげるかが難しいところでもあり、検討しなければいけないかなという感じです。

今年度の外部評価委員会は、9月と3月の2回お願いをしようと考えております。9月にはフォーラムも一通り終わって、参加者へのインタビューもほぼ終わりがけるだろうと。シンポジウムも終わったくらいの時期のほうがいいのかなと。ということで、そのくらいのタイミングで、外部専門家に中間評価的な形で外部評価をいただこうかなと思っております。

他はよろしいでしょうか。それではまた、何か思いつきましたら、戻ってきていただければと思います。

2. 平成 25 年度の計画、進捗等

(木村 浩) それでは、次の議題に移ります。業務計画書(1-3)を見ていただければと思います。今年度の業務として、これはまさに、つい先々週に契約を正式に結んだものです。

1. 委託業務の題目は「原子カムラ」の境界を越えるためのコミュニケーション・フィールドの試行」です。

2. 実施機関は、受託者は特定非営利活動法人パブリック・アウトリーチです。再委託先が、一般社団法人日本原子力学会となっております。

3. 委託業務の目的は、先ほどのものと一緒です。市民と専門家に対する社会調査をベースとしたコミュニケーション・フィールド(「フォーラム」と呼ぶ)を構築し、参加者への意識調査から、フォーラム参加によるダイナミックな意識・態度・信頼の変容を明らかにするとともに、「原子カムラ」の境界を越えるためのコミュニケーション・フィールドの枠組みおよび要件を見出すことを目的とする、ということです。

4. 当該年度における成果の目標及び業務の方法。(1)フォーラムの試行。こちらはNPO法人が実施する。再委託先と書いていないものは、PONPOがやることになっているということです。①フォーラムの準備・実施・記録。2012年度に作成した運用マニュアルを活用して、2013年上期に複数回のフォーラムを実施する。フォーラムで話し合われたことは記録し、ホームページで公開する。

②一般公開シンポジウムの準備・実施・記録。全フォーラム終了後、フォーラムに関する一般公開のシンポジウムを実施する。シンポジウムの様子は記録し、ホームページで公開する。

(2)フォーラム参加者への継続的意識調査による効果測定。こちらは再委託先の原子力学会が実施、この関係でフォーラムには土田先生にもご参加いただいているということになります。各回のフォーラムにおいて、アンケート調査を実施し、参加者の意識変容、態度変容、相互信頼の程度、フォーラムへの評価等を測定し、フォーラムの効果を定量的に明らかにする。

(3)フォーラムの再設計。①インタビューとフォーラム記録による効果検証。全フォーラム終了後、参加者にインタビューを実施し、参加者の意識変容、態度変容、相互信頼の程度、フォーラムへの評価等を定性的に明らかにする。

フォーラム記録と併せて分析し、参加者に感じられたフォーラムの効果がいかなるダイナミズム(参加者同士の相互作用)と関係していたかを明らかにする。また、「原子カムラ」の境界を越えられたかどうかという観点から、フォーラムの効果検証を行う。

②フォーラムの改善案の整理と再設計。「原子カムラ」の境界を越えるためのポイントを整理し、現時点で明らかになったコミュニケーション・フィールドの枠組みおよび要件を整理する。同時に、(1)①で失敗した点についても整理し、改善提案を行う。

これを踏まえて、フォーラムの目的、応募方法、フォーラム参加者選定方法、実施方法、

ファシリテーション方法、一般公開シンポジウムについて、再設計を行う。

③フォーラム参加者選定。フォーラム参加者選定方法に則り、参加者を選定する。

(4) 社会調査の実施。こちらは再委託先の原子力学会になっております。①調査項目の再設計。エネルギーや原子力に関する意識を測定する質問項目を再設計する。また、フォーラム参加者を決定するための市民および専門家への調査票および依頼書を、フォーラムの再設計に準じて作成する。

②市民および専門家への社会調査の実施。作成した調査票を用いて、市民の代表として首都圏住民（回収数 500 名規模）、および、専門家の代表として原子力学会員（回収数 500 名規模）に対して、アンケート調査を実施し、結果を分析する。また、公正のために、アンケート調査結果の概要はホームページで公開する。

③フォーラム参加者への意識測定項目の再設計。フォーラム参加者のダイナミックな意識・態度・信頼の変化を測定するための項目を見直す。

(5) 情報の共有および成果の取りまとめ。こちらは再委託先と合同と書かせていただいています。業務推進全体会合はこの(5)にあたるもので、そういうことで原子力学会からお金を出してもらおうということになりますので、よろしく願いいたします。

(6) 外部評価に関しても、同様に再委託先との合同ということです。年度中期・最終の2回において外部評価委員会を開催し、業務の適切性、公正性、学術的新規性等を評価する、ということです。

次のページに年間のスケジュールを書いています。

今は5月の末ということで、フォーラムの試行に関して、フォーラムの準備・実施・記録を順次行なっている。また、原子力学会が中心となって、フォーラム参加者への継続的意識調査による効果測定も実施をしているところです。

その後、8月9月ごろに一般公開シンポジウムを実施するという。

それから、8月から10月にかけて、インタビューとフォーラム記録による効果検証。その後、フォーラムの改善案の整理と再設計を行う。

時系列的に言うと、10月から社会調査項目の再設計が原子力学会のほうで始まりまして、1月に今年度も調査を行ないたいということ。その後、分析をする。

それと同時に、フォーラム参加者への意識測定項目の再設計や、フォーラム参加者の選定を行う。これが来年の2月、3月くらいです。

以上のようなスケジュールを組んでいます。このまま進めたいなと思っていますので、ご協力をお願いしたいと思います。

あとは、(5) 情報共有および成果の取りまとめということで、業務推進全体会合は全5回を予定しております。こちらは、後ほど詳しく紹介させていただきます。

また、外部評価は9月、3月を予定をしているということです。

以上、雑駁ではありますが、業務の計画書ということでご報告させていただきます。

した。何か確認事項はございますか。よろしいでしょうか。

それでは、これに従って今年度は進めてまいりたいと思いますので、ご協力よろしくお願いいいたします。

それでは、「平成 25 年度の計画、進捗等」の、進捗に当たる部分に移ります。1-4 の資料をご覧ください。フォーラムの進捗ということで、現在のところ、ここまでできていますということを簡単に書かせていただいております。

まず、1. フォーラム参加者の決定。こちらは先ほどの平成 24 年度の報告では首都圏住民 6 名、原子力学会員 10 名ということでしたけれども、首都圏住民を 4 名、どうにか追加いたしまして、10 名で実施しております。

資料 1-5 が参加者一覧ということで、名前のみ書かせていただいております。ID 番号というと、首都圏参加者の 1 番から 6 番までが、社会調査のときに応募があった方々、7 番から 10 番が、その後全体のバランスに合わせて我々のほうで追加してお願いをした方々ということになります。原子力学会員の参加者のほうは、こちらの 10 名でお願いをしたということです。

ちなみに、フォーラムに参加したかどうかということに関して、個人名は外には完全に伏せておりますので、ここでは共有をさせていただいておりますけれども、こちらの個人名はトップシークレットということで、取り扱いにはご注意願います。

ということで、どうにかフォーラムの参加者を 10 名ずつ確定して、フォーラムを迎えることができました。第 1 回フォーラム研究会を、5 月 24 日に実施をしました。その前にも元気ネットさんには自主的にフォーラムの練習をしていただいたそうですけれども。そういった準備を経て、5 月 25 日を迎えて、実施したということです。

第 1 回の簡単なご報告ですけれども、首都圏住民は 10 名全員参加していただきました。原子力学会員は、1 名は急遽予定が入ってしまったということで、9 名の参加でした。とりあえず第 1 回フォーラムは、19 名の参加者で無事に行うことができました。

運営としては、ここに書いてあるメンバーで運営をしました。

初回は、「原子カムラとはなんだろうか」というテーマでグループワークを行なったということです。

プログラムとしては、まずは自己紹介。次に、このフォーラム 5 回の実施にあたっての、事務的な説明をしました。倫理的な観点からも、どういうことで参加をするかということとちゃんと説明するのは大切ということで、しっかりとやっただ。そこまでが前半です。後半はグループワークということで、19 名の参加者を 3 グループに分けて、グループを 3 回交換しながらグループワークをやりました。最後に、この日は懇親会もあって、少なくとも表面的には良い雰囲気で行われたと思います。

その後、アンケートも実施をしております。こちらに関しては土田先生のほうで早速匿名化をさせていただきまして、私のほうに出てきております。この結果に関しては、フォ

ーラム研究会のほうでじっくりと紹介したいと思っています。また機会があれば、この辺りについても話していきたいと思っております。

フォーラムの進捗に関しては、以上になります。もう少し中身を話したほうがいいかなとも思ったんですけども、もうフォーラムが始まってしまいましたので。本来、業務推進全体会合は準備までの話をするということで計画をしていましたので、ここまででいいかなと思ったのですけれども。

参加した方から追加の情報があれば、お話いただければと思いますけれども。

—— このフォーラムの進捗のペーパーに、参加者決定のことが書いてあるのですが、その前に説明していただいた今年度の業務計画書の中にはこの項目はないので、これは前年度の作業範囲ということですよ。

(木村 浩) そうです。ただ、4名の追加は、今年度行なったことです。

—— この4名の追加のプロセスについてのご説明がなかったのですけれども、それはなくていいのですか。

(木村 浩) まず学問的な話をする、昨年度調べた社会調査のうち、原子力の利用に関する意見、あとは性別・年齢の分布が優先する順位でしたので、その分布を見たときに欠けている層の人たちをピックアップするということです。

それで、あとは個人的にお願いをしたということになります。その際に、フォーラム参加申込書を記入していただいて、ちゃんと母集団に合うような分布になるということを確認して、お願いをしたというようなプロセスです。

ただ、なかなか5回全部出席できるという人が見つからなかったのです。本当は知り合いの知り合いをたどろうと思っていたのですが、全然見つからなくて、結果として、知り合いをたどったということになります。

なので、プロセスをどのようにまとめたらいいかというと、もう本当に個人の知り合いをたどって、お願いをしたということですね。

—— 分布に合わせて、ということだと、どういう意見を持っているかということがあらかじめ分かっている人に頼んだということですか？

(木村 浩) そうではありません。5回全部参加できる人が見つかったら、お願いをするときに、申込用紙を書いてもらいました。そこに意見を聞いている部分がありますので、それを書いてもらって、回収して、回答を見て、すでに分布として埋まっていた場合は、その人はお断りをすると。そういう形で順次埋めていく。そういうスタイルでやらざるを得

なかったということです。

—— ということは、首都圏参加者の7番から10番の方は、1月の社会調査に回答された方ではないわけですね。

(木村_浩) はい、回答していない方です。

—— そうですよ。アンケートに回答された方とは連絡の取りようがないですから。

(木村_浩) はい、そうです。

—— 今、木村先生は知り合いに頼んだとおっしゃいましたが、直接は知らない方をお願いしました。

(木村_浩) そうですか。ただ、最後の1人は知り合いだったので。

—— そうですね、1人はそうです。他の3人は間を通してお願いしました。だから、どういう考えかということは知らないのです。

—— お願いするときには、まず日程的に大丈夫かどうかを確認して、それで、申込書に答えてもらった挙句、やはりお断りすることもありますからと言ってお願いをしたのです。

—— だから、結局5回は無理だと断られた方が、何人もいらっしゃるのですよね。

(木村_浩) そうなのです。むしろ、OKですと言ってくれたのが実はギリギリ4名で、その方がどうにか入ってくれたから、10名で迎えられたというのが本当のところですよ。

—— その辺りを、外部の方からおかしいと言われないように、報告書にどのように書くかは気をつけたほうがいいと思います。

—— 今、外部からおっしゃいましたが、内部からも異論が出るといいますよ。やむを得ない行為だということは十分分かりますが、8名いらっしゃった方から2名を落としたわけでしょう。その2名を落とした行為のほうがおかしいかもしれないじゃないですか。

(土田) 今のは本当のところの議論なのだけど、建前としては、何名に声をかけて、条件に合わない人がこれだけいて、結果的にうまくピタッとあった、という形の報告書を作

っておかないとまずいでしょうね。

応募は8名でした。こういう分布でした。これでは足りないので、何名に声をかけて、5回出られないということで断った人が何人でした。5回とも出席できるという方が4名でした。トータル8+4の12名の枠で検討したところ、この10名になりました。という書き方をしておけばいいのではないかと思います。

最初に落として追加したと書くと、本当はそうなのだけど、あまり記録としてはきれいではないですよ。

(木村 浩) そうなのです。ただ、昨年度の時点でそこまで確定していればそう書けたのですが、報告書の時点ですらまだ確定していなかったの、書けなかったのですよ。

(土田) でも、12の候補がいたというところから議論を始めないと、なぜ2名落としたんだということになってしまいますので。落とした人のほうが良かったのではないかと聞かれると、ちょっと困る。

(木村 浩) そうですね。

—— 応募を重視するのであれば、落としたことに疑問を持ちます。

分布を重視するのであれば、4名を入れたことは正当化できるかもしれないけど。分布を重視したということですよ。

(木村 浩) そういうことです。偏った議論をしても仕方がないので。

(土田) 今の議論と関連して、これは後で話そうと思ったのですが、来年度募集するときはどうするかという議論が少し出ていましたよね。

輿論科学協会さんの提案としては、500ではなくて、母集団を増やしたほうがいいのではないかと。ただ、500のままだったら、答えてくれた方の母集団の分布が確定するわけですよ。今年は追加しなければならなかったの、それがもう崩れているのですけど。追加しなくてもいいのであれば、フォーラム参加者がその500の中でどう偏っているかということは確定することができる。ところが、社会調査に答えなくて、フォーラムだけ参加する人を受け入れると、社会調査に答えなかった人と答えた人の間で偏りがあった場合、変なことが起こってしまうので、私は、なるべくそれはしたくないですね。

いろいろな案がありましたよね。まずひとつは、ホームページが整備されていなかったから、胡散臭い団体のように誤解された。来年度は、実施されたことがホームページに掲載されていますから、来やくなるだろうと。それから、フォーラムの回数を減らすことがもし可能であれば、もっと来やすくなる。

ということを見ると、500の母集団に声をかけても、10人くらいは集まってくれるかなという気はします。

(木村 浩) あと、これに限った話ではないのですけれども、実は、こういう取り組みに参加する人自体が偏るのですね。その問題が最後に残るのですよ。10人以上の申し込みが来ても、そこから本当に偏りのない10人を選ぶことができるかどうか、そういう最後の課題が残ってくるので、その辺りも考えなければいけない。

—— でも、偏りのないメンバーを選ぶのは、公権力で裁判員制度みたいに無作為で選んで、絶対に来いよという感じでやらない限りは、不可能じゃないですか？

(土田) これはただの推測ですけれども、社会調査には答えたくない。でも、フォーラムの申込用紙を調査員が置いていった。行ってみようかな。ものすごく反対している人じゃないと来ないような気がするのですよ。

—— あと、同じ曜日に5回というのも、バイアスを作る要因ですよ。まあ、そんなことを言い出すと集められなくなるのですけど。

(木村 浩) でも、バラバラの曜日に5回なんて、誰も来ないですから。

—— それはそうだけど。夜にやったりすれば、多少は違うかな。

(土田) ただ、18時から始めて21時となると、遠方の方は来づらいですよ。

—— それと、木村先生が先ほどおっしゃった偏りには、考え方だけでなく、若い人が少ないという点もあったのです。それで、最後の何人かは若い人を探したという経緯があるのです。

私はむしろ、50代の人ばかりで話をするよりも、年代にばらつきがあったほうが、より社会の意見としていいのではないかと思うのです。

(土田) そこですね。まだデータを入力しただけで分析していませんけど、1月の社会調査と同じアンケートを事前に答えてもらったのですよ。その分布がどれくらい偏っているか、ということではっきり分かります。例えば、原子力学会に対するイメージを聞く項目がありましたよね。あの辺りがどのくらい偏っているのか。

—— ああ、では、この7番から10番の方は、あのアンケートをやってもらったのですよ。

(土田) ええ、全員にやってもらいました。

(木村^浩) 全員に、記名でやってもらったのです。ただ、誰が書いているかは、土田先生しか分からない。

(土田) ただ、「私しか分からない」と言ったのは、フォーラムが始まる直前で、もう書いた後でしたから。書いている最中は、自分の意見を全部知られるんだなと思いながら書いた可能性は大いにあります。

(木村^浩) 一応、一緒に郵送したプリントにそういうことは書いています。調査担当の土田先生と木村だけがだけ知ることができて、フォーラム期間中はその 2 人だけが分かるようになっていて、他のメンバーにはこの答えは一切分かりません、ということを書いて、やってもらっているということですね。

—— 次年度から（応募者を）増やすための方策のひとつの提案です。これは第 1 回フォーラムの中身の紹介にもなるのですが。終わった後の懇親会で、非常に興味深い話をいくつかお聞きしたのです。

首都圏の方からも、学会参加者からも、同じような意見がありました。一般の方からは、相当肩に力を入れて参加したけれども、全然力む必要はなかった、という感想が印象的でした。学会員側からは、相当な覚悟をもって参加をして、血祭りにあげられるのではないかと思っていたけど、そういう心配はまったく杞憂に終わりましたという話があったのですよ。

だから、応募をするときに、一般の方も、学会員も、同じような心配をしていて、それがひとつの大きなバリアになっているのではなかろうかと。

私の提案は、これが許されるのかどうか分からないけど、実際に参加した方に、名前は伏せて匿名で、一言、そういう感想をいただく。まあ、化粧品の使用前使用後みたいな話なのだけでも、こんな印象を持ちました、非常に有意義でしたというようなお話を、生の声ということで、ご本人の了解もいただいてホームページに載せておくと、役に立つのではないかという気がしました。

(木村^浩) なるほど。本当は、写真も載せられればいいのですが、写真は駄目なのです。文章しか情報が出せないというのが、そもそも大変なのですよね。

—— ホームページを見た人に、作り話じゃなかろうかと思われないようにするには、どうしたらいいか。

(土田) 真面目に読んでくれれば、フォーラムの結果は全部ホームページに載るわけだし、シンポジウムの結果も載るわけだから、今おっしゃったような流れの話が全部載っているわけですね。ただ、それだけではアイキャッチにならないから、やはり化粧品の広告みたいに、感想みたいなものを見やすい形でレイアウトして、それを載せるのでしょね。

で、それが作り話じゃないかと思われるようであれば、詳しくはフォーラムの議事録を読んでください。シンポジウムの議事録を読んでください。同じことが書いてあるでしょう、という形でいければいいですね。

(木村 浩) そうですね。裏表1枚くらいのカラーで、実績はこうでした、こんな意見がありました、というのがあると、違うかもしれない。ああ、こういうものなのか。ホームページもあるんだ。興味がある人だったら見るかもしれないし。

(土田) ただ、これはフォーラムが終わった後の議論だと思いますね。

例えば、原子力をやめさせたいと思って活動をしている人たちが、このフォーラムのホームページに気づいたときにどういう反応をするか。そんなことをやって情報をでっち上げている、というような感想を持つ人だって、世の中にはいないわけではないだろうと思います。

だから、このフォーラムの結果が市民権をちゃんと持てるような形にしていけないといけないですね。

—— やはり、最後に開くシンポジウムも、公開で、新聞記者を呼んでやるのが大事ではないでしょうか。そこで発言して下さるのが一番の生の声ですよ。

(土田) フォーラム研究会で木村先生からご紹介があると思いますけど、フォーラムの最後のアンケートで、ほとんどの方が自由記述にご意見を書いています。

もっとちゃんと反対したかったというような趣旨のことを述べている人も中にはいます。運営側に対して強い言葉を投げかけている方もいます。その辺りのご意見をどう評価したらいいのか。そういう声をもっと浮き上がらせなければならないのか。それとも、サイレントマジョリティーということを考えれば、そういう方は一部なのだから、あまりそういう人の声を大きくしてはいけないのか。私自身も、どうしたらいいのだろうと思っているところです。

—— 今回、ファシリテーターが非常にうまくいったのではないかと思うのですね。

各班をぐるぐる回っていたのですけれども、当初心配していたのは、よくしゃべる人と

そうでもない人がいたのです。だけど、ファシリテーターが、サブファシリテーターと組んで、うまくバランスをとって、それで皆さんがしゃべりやすくなったような気がするのですね。

グループワークは3回やりましたが、1回目は少しぎくしゃくした感じがしたのですが、2回目以降になると、ファシリテーターも変わりましたし、各班もメンバーが変わって、非常に皆さんが、リラックスとは言いませんけれども、かなり一生懸命話すようになった気がするのです。

だから、ファシリテーターが大事なのではないか。ファシリテーターがどういう方向になるかによって、そのグループも含めて、変わっていくような気がするのですよね。

—— それは、我々から見ると望ましい運営なのだけれども、ノイジーマイノリティの方から見れば不満になるわけです。ノイジーマイノリティの方は、自分の意見で全体を席卷したいわけですから。

—— ファシリテーターになった人が延々と自分の主張をしているシーンもありましたからね。

—— それを、サブファシリテーターが、ちょっと、という感じで止めていましたので、良かったと思うのですけれども。私はファシリテーターがとても大事ではないかと思うのですよ。

—— 共感を持った人が付箋にシールを貼っていく。シールの数が少ない付箋は取り上げられないわけです。ノイジーマイノリティの人にとってみたら、なぜ私の意見が落とされるのかという不満も当然ながら起きるわけです。

—— ノイジーマイノリティというのは相対的なものですので、一方的にその方たちをノイジーマイノリティと決め付けてよろしいのですか？

—— いや、分かりません。だけど、その場では、そういう直接的な発言もちらっと聞こえましたね。

—— この中では（我々から見たら）ノイジーマイノリティかもしれませんけど。

（土田） だから、ルールをかちっとするしかないですよ。あなたの意見は偏っているからいけない、ということは絶対に言えない。（例えば1人で長時間話すのは）ルール違反だから発言をやめてくださいと言わないといけない。

そうすると、フォーラムの中にルールを持ち込むのが本当にいいかどうか、ということ
はもう一度議論したほうがいいと思うのです。

(木村_浩) その辺りについては、一応提案して持ってきていますので、午後に少し議論さ
せてもらえればと思います。

—— だけど、シールが少ない意見も、ずっと貼って残してありましたから。途中で消し
たわけではないから。そういう意味では、少数意見を出した方も、少しは溜飲が下がって
いるかもしれないなと思って眺めていましたけど。

—— 表情的には不満が残っていましたよね。

(木村_浩) でも、そんなにエキセントリックな意見は出ていないですよ。

—— そんなに出ていないと思いました。

—— あのかきは、「シールが少ない意見でも、どうしてもこれだけは取り上げてほしい、
というものがあつたら言ってください」ということは再三言っているのですね。そういう
余地は残しつつ進行しているので、でも、そうなるとういうものは出ないのですよね。

—— 話題が飛んで申し訳ないですが、懇親会は会費でやったのですか？

(木村_浩) 会費です。

—— 会費を取ったのですね。それで、全員参加されたのですか？

(木村_浩) 全員ではないです。

(土田) 用事があつて帰られたのか、参加したくないと思つて変えられたのか、それは
分かりません。

—— この後も懇親会を開く予定はあるのですか？

(木村_浩) ないです。

—— 厳しめの意見を出した人は、割と残っていましたね。

—— 話し足りないからでしょうね。

—— 最後の一言というのは、ものすごく重要なのですよね。

(木村^浩) フォーラムは、そんな形で進めています。第1回は、表面的にはいい感じだったかなと思いますけれども、いろいろな課題があるということが明らかになってきましたので、その辺も調整しながら、で、全部は調整しきれないと思うので、どこまでやるかという折り合いも考えながらやらないとな、と思っています。その辺りを、午後に話せればと思っています。

(土田) 今お話を聞いていて思ったのですけれども、今回、フォーラムで自分の意見表明をするわけですが、自分の生活の中で、他に原子力に関して意見表明することがないという方もおられると思います。ところが、どこかの反対のグループと仲良しの方がいるかもしれないし、私が聞いた中では、福島事故以降、自分でホームページを立ち上げて、専門家の立場から、これはこういうことなんだと情報発信をし続けているという人もいました。

なので、このフォーラム以外で、自分がどういう情報発信をしているかということ、聞けるようであれば、調査の中に入れて、聞いてみたいと思いますね。

—— 首都圏参加者で、自分のブログ (Facebook) にフォーラムのことを書いていいかという質問をされていた方が1人いましたね。

(土田) 心理学で言うとコミットメントというのですけれども、何かに自分の立場を表明していると、なかなか変えられないのですよね。なので、フォーラム以外でコミットしているかどうかを調べたいなと思いました。

(木村^浩) フォーラムが終わった後で大丈夫ですか。

(土田) あとで解釈するというのであれば、終わった後でも大丈夫でしょう。ただ、フォーラムの中で、積極的にそれを言ってくださいみたいなことを言うのであれば、話は別ですけれども。フォーラムの中で、普段あなたはどのようなことをしていますか、みたいなことを聞かないのであれば、終わった後でいいですね。

(木村^浩) 特に聞かなくてもいいでしょうか。

(土田) どうなのでしょう。話の流れで自分から言い出すかもしれませんし。

—— ごめんなさい、ブログに書くことは OK したのですか？

—— チャタムハウスルールを決めたでしょう。だから、こういう話があったということは言ってもいいけれども、

—— こういう会合があったということは書けるのですか？

(木村 浩) そこは書いて大丈夫です。

—— だけど、そうすると参加者がバレバレになるけど。

(木村 浩) その人はばれますね。それは、自分は参加しているんだということを社会に出してもいいという人は、いいですよと言っています。

—— フォーラムの場で、誰がどういうことを言ったかということは書いてはいけませんと説明しています。

—— 自分がこういう会合に参加しました、までは書いて構わないということですね。

(木村 浩) それは自分のプライベートの話として、そこまでの話だったらしてもいい。でも、その後はやめてくださいということは、質問されたので、言ってあります。やはり、しっかり説明会をしておいてよかったですね。

ということで、フォーラムに関しては、次回は少し詳しく話せるのではないかと思いますので、期待をしていただければと思います。

3. その他

(木村 浩) 最後に、その他の議題に移ります。議事次第を見てください。

まず、ホームページが 3 月くらいにほぼ完成して、そちらで様々な情報が公開がされています。社会調査の結果はすぐに公開していましたが、全体としてある程度まとまったのは 3 月くらいになります。アクセスしていただければ、だいたいのは見れると思いますので、興味があれば確認してください。

次は、会合の日程です。この業務推進全体会合について、先ほど、全 5 回を予定してい

るという話をしました。私が考えていた 5 回がどのくらいのタイミングかということが書いてあります。

第 2 回が 8 月。フォーラムが一通り終わって、シンポジウムは 9 月 14 日、16 日のどちらかにしようと思っ
ていますので、そちらの準備状況などがお話できるかなということで、8 月くらいに第 2 回の業務推進全体会合を持ちたい。

第 3 回は 10 月。フォーラムの分析も進んでくると思っていますので、その進捗と、シンポジウムの報告をしたいと思っています。

第 4 回は 12 月です。社会調査票が出来上がってくる頃になりますので、その確定。あとはフォーラムの再検討の状況や、先ほどお話が出たような、どうやって（応募者を）巻き込んでいくのかということに関しても、ディスカッションしていければと思っています。

第 5 回は翌年 3 月。成果のとりまとめということですが、

以上のような全 5 回のスケジュールで、要所要所にやっていきたいと思っていますので、よろしくお願いします。

昨年度と同じように、早いうちから日程調整をして、予定を確定してしまったほうがいかなと思いますので、第 2 回以降は、この後すぐに皆さんに予定をお聞きして、少なくとも日時のセットだけはしたいと思っています。ご協力をお願いします。

次はシンポジウムの日程です。9 月 14 日（土）もしくは 16 日（月・祝）の予定です。16 日は確実に武田ホールが予約ができると。14 日は、もしかしたら私が別件で予約している可能性がある（笑）、確認してみないと分からないのですけれども、もし予約がまだ残っていれば、そちらでもできるということです。

フォーラムはずっと土曜日ですので、できれば土曜のほうが、参加者が見に来てくれる可能性が高いかなと思っています。場所との関係で、これから決めていきたいと思っています。

—— 以前、21 日（土）をこちらの都合で除いていただいたのですが、大丈夫になりましたので。早いうちに決めていただければ、21 日でも可能です。

（木村 浩） 分かりました。早いうちに考えてみます。ということで、シンポジウムの日程も、決まり次第、皆さんにはご連絡を早めに差し上げようと思っていますので、よろしくお願いします。

次は学会発表についてです。今年の秋の大会は、八戸工業大学で、9 月 3 日から 5 日という日程です。私と竹中君が 1 件ずつ研究発表をします。

その他に、特別専門委員会主催の総合講演・報告が確定しています。『「原子カムラ」の境界を越えるためのコミュニケーション』という題でお話をしたいと思っています。1 番目は「原子カムラ」について、竹中君から話してもらおう。2 番目が土田先生から、社会調査の話をしていただく。3 番目はフォーラムという取り組みをやっていますという話と、それに

についての簡単な情報の提供を、私がする。

学会の場で、この後シンポジウムもありますので、興味があれば来てくださいということをもメディアの人に言う機会にもなるということで、シンポジウムは8月末ではなくて、9月開催にしたというような経緯もあります。全体のメディア戦略も考えていきたいと思っていますので、第2回の業務推進全体会合ではそういうところに関してもご意見いただければと思っています。

—— 発表をすると、社会からいろいろな反応が出てくると思いますから、それに対する準備も考えておいたほうがいいかもしれませんね。

こういう研究成果は具合が悪いと思う人たちからの攻撃は当然あるでしょうから。

(木村^浩) その辺りは、シンポジウムをどのように運用するかというところとも絡んできますね。かといって、露骨なのはよくないので。そういう人たちも意見を言えるような場は持たないといけませんから。

ということで、今年度も進めてまいりたいと思いますので、よろしく願いいたします。

—— ごめんなさい、最後に一言よろしいですか。午後のフォーラム研究会に出られないので、前回の反省点をここで申し上げてもいいですか。

私は、前回サブファシリテーターと、兼任でタイムキーパーをしました。皆さんの様子を見ていて思ったのですが、やはり最初に決めた時間を延ばさないで、ちょうど終わるほうがいいなと感じました。

特に1回目でしたし、一般参加の方の中には話し慣れていない方がいたり、なかなか与えられた時間内でしっかりと発表できない方もいたとは思いますが、あまりそういうところで変に時間を調整したりしないで、時間は守るという方向でやったほうがいいかなと思いました。

というのは、「過ぎてもいいですか」という問いかけを総合ファシリテーターがして、まあいいですみたいな雰囲気があったのですが、その場にもし私が一般市民として参加していて、次に用事があったとしても、「いや、私は用事があるからちょうどで終わってもらわないと困る」とは言えないですね。だから、実は、聞いても仕方がないことですし。やはり進行としてはきっちり時間通り終わっていく。皆さんもそのつもりでご予定して来ていると思いますので。

(木村^浩) ありがとうございます。午後の話になりますが、第2回は、かなり余裕をもったスケジュールを組んでいます。

実は提案することがたくさんあるのです。ある意味では、先ほど少し話題になりましたが、いわゆる声の大きい人たちの意見をある程度容れる。たぶん、そういう人たちからあ

る程度公平に見えるような運営をしていかないといけないと思いますので、そのためにどうしたらいいか、という提案をさせていただいています。詳しくはまた後ほど。

はい。それでは、第1回業務推進会合は、これで終わります。ありがとうございました。

以上